

日韓共同理工系学部留学生予備教育における韓国人学習者の日本語学術 共通語彙の習得

—日本での予備教育の効果の検証—

佐藤 尚子¹⁾・松下 達彦²⁾・笹尾 洋介³⁾・田島 ますみ⁴⁾・橋本 美香⁵⁾

¹⁾千葉大学国際教養学部 ²⁾東京大学大学院総合文化研究科 ³⁾京都大学国際高等教育院

⁴⁾中央学院大学法学部 ⁵⁾川崎医科大学医学部

Acquisition of Japanese Common Academic Words by Korean Learners in the
Japanese Language Preparatory Course for Korean Students of Science and
Engineering (Joint Japanese-Korean Project): Examining the Effectiveness of
the Preparatory Course in Japan

Naoko Sato,¹⁾ Tatsuhiko Matsushita,²⁾ Yosuke Sasao,³⁾
Masumi Tajima,⁴⁾ Mika Hashimoto⁵⁾

要旨

日本の大学で学ぶためには、専門用語のほかに、分野に関わらず学術的な文脈で用いられる学術共通語彙を習得する必要がある。本稿では、本研究グループが開発したテストを使用して、韓国での予備教育終了時と日本での予備教育終了時の日韓共同理工系学部留学生の学術共通語彙の習得状況を調査し、日本での予備教育の効果を検証した。韓国での予備教育終了時に、上位に属する学生は、韓国での予備教育で既に日本人学生と同程度に20,000語レベルの学術共通語彙を習得しており、日本での予備教育では新たに学術共通語彙を習得しているとは言えない。一方、韓国での予備教育で下位に属する学生は、日本での予備教育期間中に多くの学術共通語彙を習得している。ただし、日本での予備教育でも、日本語の中級レベルの内容が十分習得できていない学生は、学術共通語彙の習得も十分とは言えず、学部入学後も、学術共通語彙が習得できるように教育を行う必要がある。

キーワード

学術共通語彙、日本語学術共通語彙テスト、使用頻度、日韓共同理工系学部留学生、日本語予備教育

1. はじめに

2000年度より日本と韓国の間で日韓共同理工系学部留学生事業が始まった。この事業に参加する韓国人学生は学部入学前に韓国で6か月、日本で6か月、計1年間の日本語予備教育を受ける。

日本での予備教育では、韓国での予備教育を受けて、学部での教育に備え、より高いレベルの文法、語彙、漢字、口頭表現、文章表現などの日本語科目、および、日本語で数学、物理などの専門科目が学べるように、授業科目を構成している。

本稿では、日本の予備教育で養成された日本語能力の中で、日韓共同理工系学部留学生（以下、日韓生）が、学部での学びに必要な、分野に関わらず学術的な文脈で高い頻度で用いられる学術共通語彙に注目し、その習得状況について調査し、考察する。その結果から、日本での予備教育の効果と問題点について明らかにする。

2. 日韓共同理工系学部留学生とは

今回、調査を行った日韓生は日本と韓国の間で始まった日韓共同理工系学部留学生事業によって、日本の国立大学の理工系学部留学する学生である。この事業は2000年度から開始され、毎年100名の新規学生が日本へ留学している。

この事業に参加する韓国人学生は学部入学前に1年間の日本語予備教育を受ける。3月から8月まで韓国で6か月間の日本語予備教育を受け、9月下旬から10月上旬に渡日し、10月から3月まで、翌年4月から入学する国立大学で、さらに6か月の日本語予備教育を受ける。そして、学部入学後は日本人学生とともに日本語による授業を受ける学生である。

千葉大学では、第1次第1期生（2000年10月渡日）から第2次第9期生（2018年10月渡日）までで計87人を受け入れている。

今回、調査を行ったのは2016年10月に渡日した第2次第7期生である。

3. 日本での予備教育の授業内容

韓国で実施された予備教育を受けて、日本の予備教育では、中級レベルの日本語の授業を受けるのが一般的である。ここでは、千葉大学国際教育センターで実施している予備教育の内容を1例としてあげる。

千葉大学では、渡日後、プレースメントテストと面接により、日韓生を中級の3レベルのうちのいずれかに配置している。各レベルとも、日本語の授業は週6コマである^[1]。授業内容を表1にまとめた。週当たりのコマ数と教科書を使用している場合は教科書名を示した^[2]。

表1 日韓生が受講する日本語の授業

レベル		授業内容・週当たりのコマ数・教科書
中級	400	総合（3コマ）『日本語5つのとびら 中級編』（凡人社） 口頭表現（1コマ）、作文（1コマ）
	500	総合（3コマ）『日本語5つのとびら 中上級編』（凡人社） 口頭表現（1コマ）、文章表現（1コマ）
	600	読解1（1コマ）、読解2（1コマ）、口頭表現1（1コマ）、 口頭表現2（1コマ）『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上 級編』（くろしお出版）、文章表現（1コマ）『改訂版 大学・大学院 生の日本語4論文作成編』（アルク）
	3レベル 共通	漢字（1コマ）『KANJI IN CONTEXT 改訂新版』（ジャパントイムズ）

4. 学術共通語彙とは

学術共通語彙とは、学術的文章において一般的文章より高い使用率を占める語彙のことである。具体的には、人文、社会、理工、生物・医学の4領域それぞれで対数尤度比を用いて特徴語抽出を行い、3領域以上で特徴語として選ばれた語を指す（Matsushita 2012、松下2016）。大学での学習においては、初級の基本語彙の次に重要な語彙だと言える。

特定の分野で多く使われる専門語彙は、その専門性から、授業の際に教員は、板書する、その意味を説明するなど明示的に扱うが、学術共通語彙は習得されていることを前提として授業が進められるのが一般的である。このため、学術共通語彙が習得できていないと、学術的な話題が理解できず、大学での学びに支障をきたしてしまう可能性が高い。

本稿では、日韓生が、日本での6か月の日本語予備教育を修了した段階で、どのような学術共通語彙を、どの程度理解しているのかを明らかにし、日本での予備教育の効果を検証することを目的とする。調査には、学術共通語彙知識測定のために開発された「日本語学術共通語彙テスト Version.1」（田島ほか2018）を使用した。

5. 日本語学術共通語彙テスト

テスト項目にするターゲット語75語は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づいて作成された「日本語学術共通語彙リスト」（松下2011a）から選んだ。「日本語学術共通語彙リスト」にあげられている語の中から「日本語を読むためのデータベース」（松下2011b）での頻度順位に従って、上位20,000語の中から250語に1語の割合で、できる限り等間隔に選んだ。ただし、初級語彙（旧日本語能力試験出題基準における3級と4級の語

彙)にあたる上位1,250位までの語は除外した。

問題形式は、ターゲット語を含んだ文または語句を示したうえで、三つの選択肢の中からターゲット語の言い換えとなる表現を正解として選ぶものである。配点は1問1点で、75点満点である。

6. 日本での予備教育終了時の学術共通語彙の習得状況

日本で予備教育を受けた学生の学術共通語彙の習得状況がどのように変化したかを知るために、2017年1月から3月にかけて6大学(大阪大学・京都大学・埼玉大学・千葉大学・東京工業大学・横浜国立大学)で予備教育を受けた26名に対して、「日本語学術共通語彙テストVersion.1」を実施した。この26名に対しては、韓国での予備教育終了時(2016年8月)に同じテストを実施している。

26名の韓国での予備教育終了時に実施したテストの結果は平均56.4、最大値70、最小値26、標準偏差11.0だった。一方、日本での予備教育終了時に実施したテストの結果は平均59.0、最大値72、最小値46、標準偏差7.0だった。26名の得点を韓国における予備教育終了時の得点と比較した(表2)。

2016年4月から10月にかけて日韓生が配置された実績がある国立大学2校の日本人学生(文系学部生も含む)1年生79名、2年生2名の計81名に対して、同じ「日本語学術共通語彙テストVersion.1」を実施したところ、平均68.7、最大値74、最小値60だった(佐藤ほか2017)。韓国での予備教育終了時に、日本人学生の最低点である60点以上ある、日韓生13名の平均を見てみると、韓国での予備教育終了時は64.0、日本での予備教育終了時は63.2であり、対応のある t 検定では有意差($\alpha=0.05$)は検出されなかった($t(12)=0.97$, $p=.352$, Cohen's $d=0.20$)。この結果は、日本人大学生と同程度に学術共通語彙知識があった日韓生は、日本での予備教育で新たな語彙の習得が進まなかった可能性があることを示唆している。

一方、韓国での予備教育終了時の得点が60点未満の日韓生13名には、大きな伸びが見られた(表3)。60点未満だった日韓生の得点を見てみると、韓国での予備教育終了時が平均48.8であるのに対して、日本での予備教育終了時は平均54.8であり、対応のある t 検定の

表2 韓国における予備教育終了時と日本における予備教育の終了時の得点分布(26名)

得点	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-75	平均	標準偏差	計
韓国での予備教育終了時 (2016年8月)	1	1	3	8	11	2	56.4	11.0	26
日本での予備教育終了時 (2017年1月~3月)	0	0	2	9	13	2	59.0	7.0	26

表3 韓国における予備教育終了時に60点未満の日韓生の得点の変化 (13名)

得点	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-75	平均	標準偏差	計
韓国での予備教育終了時 (2016年8月)	1	1	3	8	0	0	48.8	9.3	13
日本での予備教育終了時 (2017年1月～3月)	0	0	2	7	3	1	54.8	7.0	13

結果、有意差 ($\alpha=.05$) が検出された ($t(12)=2.82, p=.016, \text{Cohen's } d=0.72$)。20点以上も得点が伸びた者も1名いた。20点台、30点台の日韓生はおらず、全体として日本人学生の点数に近づく傾向があることが明らかになった。

韓国での予備教育では、日本語能力別に第1班から第6班まで6つの班に分かれて、日本語の授業を受けている。韓国での予備教育開始時の班は、第1班から第3班までが「日本語学習期間6か月未満の学生」、第4班、第5班が「日本語学習期間6か月以上の学生」、第6班が「日本語能力試験N1、N2合格者、日本語学習期間1年以上の学生」で編成され、その後、定期試験の結果等で班替えが行われる(趙2016)。

今回のテスト結果で上位だった13名が韓国での予備教育終了時に所属していた班は、第1班～第3班が2名、第4班～第6班が11名、下位だった13名が所属していた班は第1班～第3班9名、第4班～第6班が4名だった。韓国での予備教育終了時に、既に日本語のレベルが中級以上に達していた日韓生(第4班～第6班所属学生など)は、韓国での予備教育の段階で上位20,000語レベルに現れる学術共通語彙を日本人学生と同程度に習得している。一方、韓国での予備教育開始時に日本語学習を始め、韓国の予備教育で中級の内容を学習しているにもかかわらず、中級レベルの学習内容を十分習得できていない、韓国の予備教育で下位層だった日韓生(第1班～第3班所属学生など)は、韓国での予備教育では学術共通語彙を十分習得できず、日本での予備教育中に多くの学術共通語彙を習得したと考えられる。ただし、日本での予備教育終了時に、中級の学習内容の習得が十分ではない学生は、学部で授業を受けるには学術共通語彙の習得は不十分で、学部入学後も中級レベルの学習を続ける必要があると言えよう。

7. どのような語の習得が進んだか

下位13名だった学生は、日本での予備教育期間中にどのような語の習得が進んだのだろうか。韓国での予備教育終了時と日本での予備教育終了時のテストの結果において、正解者数が4名以上増加した5語を表4に示した。

習得が進んだと考えられる5語は、20,000語レベルで抽出した対象語の中では、頻度順

表4 習得が進んだ語

	対象語	頻度順位	韓国での予備教育終了時の正解者数	日本での予備教育終了時の正解者数	増加数
1	間引き	13,114	1	9	8
2	横並び	19,392	4	10	6
3	コンセプト	10,125	4	8	4
4	議事	11,044	6	10	4
5	スコープ	17,390	8	12	4

位が10,000より低く、日本語教育では接する機会が少なく、習得しにくい語彙だと言えよう。それらの語について、日本に滞在して、日常的に日本語に触れる環境があること、また、学習が進んで、新たな語彙として習得した、あるいは、類推が可能になったことなどから、習得が進んだと考えられる。

8. おわりに

以上、日韓生の韓国での予備教育終了時と日本での予備教育終了時の学術共通語彙テストの結果を比較し、日本での予備教育の効果について考察を行った。

韓国での予備教育時に得点が60点以上だった上位の日韓生は、既に日本人学部生と同等程度、学術共通語彙を習得しており、日本での予備教育期間中に新たに習得しているとは言えない。一方、韓国での予備教育終了時に59点以下だった下位の日韓生は、日本での予備教育期間中に多くの学術共通語彙を習得している。日本での予備教育では中級レベルの日本語教育と専門科目に関わる教育を実施している場合が多い。これらの学習内容を習得すれば、日本人学生と同レベルの学術共通語彙が習得できると言えよう。ただし、日本での予備教育終了時に、中級の学習内容の習得が十分ではない学生は、学部で授業を受けるには学術共通語彙の習得は不十分である。そのため、学部入学後、学術共通語彙が習得できるよう学習を続ける必要がある。

謝辞

日本での予備教育終了時に、日本語学術共通語彙テストを実施し、データの収集にご協力くださった各大学の教員の皆様に厚く御礼申し上げます。

付記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）「グローバル化に向けた日本語の語彙テスト開発」（課題番号15K02631、平成27年度～29年度、研究代表者 佐藤尚子）の助成を受けた。

注

[1] これ以外に専門科目に関連した授業が週9コマ開講されている。

[2] 詳細は「千葉大学国際教育センター日本語受講登録システム」(<https://jlc.chiba-u.jp/top.php>)を参照のこと。

参考文献

- 佐藤尚子・田島ますみ・松下達彦・笹尾洋介・橋本美香（2017） 使用頻度に基づく学術共通語彙テストの開発と実施—国立大学の学生と、国立大学に入学する韓国人日本語学習者を対象として—、第19回専門日本語教育学会研究討論会誌、pp. 14-15
- 田島ますみ・佐藤尚子・橋本美香・松下達彦・笹尾洋介（2018） 日本語学術共通語彙テストの開発、人間・自然論叢、45、中央学院大学、pp. 19-31
- 趙顯龍（2016） 2016年第2次7期生韓国予備教育の現状の報告、2016年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会資料
- 松下達彦（2011a） 日本語学術共通語彙リストVer.1.01、<http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/list.html>（2018年11月2日参照）
- 松下達彦（2011b） 日本語を読むための語彙データベース（VDRJ）Ver. 1.0（教師用）<http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/database.html#vdrj>（2018年11月2日参照）
- Matsushita, T. (2012). In what order should learners learn Japanese vocabulary? A corpus-based approach. PhD論文、Victoria University of Wellington.
- 松下達彦（2016） コーパス出現頻度から見た語彙シラバス、ニーズを踏まえた語彙シラバス（森篤嗣編）、くろしお出版、pp. 53-77